

令和 6 年度 高等学校入学者選抜審議会 第 2 回専門委員会 記録

令和 6 年 1 0 月 3 1 日（木）14：00～16：00
県庁 1 1 階 第二会議室

＜審議会専門委員＞

熊谷 龍一委員、佐藤 英委員、菊池 晃子委員、吉田 尚美委員、佐藤 彰彦委員、佐々木 久晴委員
（欠席：河本 和文委員、中山 治彦委員）

＜事務局＞

菊田 英孝高校教育課長、高橋 佳宏教育改革担当課長、西城 光洋仙台市教育局学校教育部高校教育課長

事務局	（資料の確認） （公開の確認）
	（開会）
事務局	（委員の紹介）
高校教育課長	（開会あいさつ）
事務局	（事務局関係出席者紹介）
	（委員長 司会進行開始）
委員長	報告 1「第 1 回入学者選抜審議会における審議内容の確認について」、事務局から説明願う。
事務局	（事務局より説明）
委員長	以上、専門委員会設置の経緯や令和 9 年度開校予定の ideal スクールについての説明があった。御質問や御意見はいかがか。
各委員	（質問・意見なし）
委員長	次に報告 2「大阪府立高等学校の視察について」事務局から説明願う。
事務局	（事務局より説明）
委員長	以上、入試制度の概要や特別な入学者選抜に関する大阪府立高校の施策について事務局から説明があった。この点について御質問や御意見はいかがか。
佐藤彰委員	在籍数、定員数を可能な範囲で教えて欲しい。
委員長	事務局の方ではどうか。
事務局	西城高校は定員 2 1 0 名に対し志望者 2 2 0 名、中央高校は普通科とビジネス科があり、定員は普通科が 1 6 0 名、ビジネス科が 8 0 名、志望者は合わせて 1 9 1 名となっている。
委員長	私からも 1 点確認させて欲しい。補助資料 1 ページ目一番上の「1 エンパワメントスクール」の（2）入学者選抜の特徴の 1 つ目の○を見ると、第 1 手順では面接で評価し、募集定員の 50%を選抜すると書いてあり、学力検査がないかのように読めたが、報告関係資料 9 ページでは、学力検査の基準点に達したもののの中から定員の 50%を上限としているとある。こちらでは逆に学力検査がまずあり、そこで決めているように取れるが、どう解釈するとよいか。
事務局	まず全員に対して学力検査を実施している。その上で教育委員会の方で設定した基準点があり、その基準点を超えた生徒に対して、第 1 手順では面接を実施し選抜をしていく。第 2 手順においてはその基準点は設けず、学力検査点と調査書の総合点で選抜をしている。
委員長	その他、御意見、御質問はいかがか。
事務局	先ほど、50%の選抜の範囲（9 ページで示しているもの）をまず対象内として、実際の選抜については、面接を重視した形の手順で選抜を行うという趣旨である。 よって、9 ページに記載する基準に達したものの中というのは、点数で選んでい

	るのではなく、選考対象者をこの範囲内で設定し、選抜の方法としては補助資料の 1 ページにあるような面接を重視したような形で、第 1 段階の選抜を行っているということになる。
委員長	追加で確認したい。定員の 50%を決めるところは、学力検査得点の高い人から選抜されるということになるのか。その後の面接では、学力検査の得点は一切加味せず、学力検査の点数がどれだけ高くても、面接だけの得点で合格が決まるということになるのか。
事務局	まず第 1 手順の対象となるかどうかの基準が設けられている。基準点を超えた者は全員選抜対象になる。選抜対象となった者から、面接等の評価において 50%を上限として選抜を行うという流れになる。
佐藤英委員	先進的な取組を行っている学校等の視察を行ったということだが、話を聞く中で、課題や検討が必要な点について出てきたことがあれば教えて欲しい。
事務局	学校側で入学を期待する生徒とのずれ、生徒側から見た場合いわゆる「ミスマッチ」が生じている部分が見られるということである。これを減らすために、選抜の制度や方向性の部分で力を入れているとのことである。 特にクリエイティブスクールは単位制の学校でもあり、多様な生徒が入学してくるが、途中で退学してしまう生徒も中にはいる。このようなミスマッチを減らすことが課題だと聞いている。
委員長	その他、御意見、御質問はいかがか。
吉田委員	エンパワメントスクールとクリエイティブスクールの学力検査は共通の問題が使われているのか、それとも学校によって様々な種類が準備されているのか教えていただきたい。
事務局	補助資料の 3 ページ以降になるが、エンパワメントやクリエイティブスクールで使用している学力検査問題の種類などが記載してある。A が基礎的な問題、B が標準的な問題であり、教育委員会が作成準備をした問題の A、B のどちらかを選んで実施するということである。問題については、共通の問題ということになる。
菊池委員	話を聞いていて、エンパワメントスクールとクリエイティブスクールの違いは分かるが、エンパワメントスクールとステップスクールが似ていると感じる。エンパワメントスクールからステップスクールに改編した学校があることも影響しているとは思いますが、分かる範囲で、大きく何が違っているのか教えて欲しい。
事務局	今回の視察では、ステップスクールは日程が合わず行くことができなかった。 支援の点で、より困り感の強い生徒の入学を想定していたり、生徒に対する支援をしやすいような部分がステップスクールにはあるという印象である。 補助資料 10 ページに、ステップスクールのパンフレットを掲載している。西成高校と岬高校である。それぞれの学校のコンセプトの違いだが、西成高校は学び直しを必要とする生徒の支援に力を入れている印象を受ける。岬高校は、自然や社会の中で、コミュニケーション能力等を培うことに力を入れている学校という印象を受ける。エンパワメントスクールで支援しきれない部分について、手厚く支援していく意味合いで、設置されているという印象を受けている。
委員長	その他、御意見、御質問はいかがか。 では、(3)【審議】「ideal スクールにおける入学者選抜の在り方について」事務局から説明願う。
事務局	(事務局より説明)
委員長	以上、事務局より「ideal スクールにおける入学者選抜の在り方について」の説明があった。これから入学者選抜方法の検討に当たるが、その前に ideal スクールの教育課程や、どのような生徒の入学を想定しているか等の情報が提供されると、委員も検討しやすいと思うが、事務局の方ではいかがか。
教育改革担当課長	現在 ideal スクールの教育課程カリキュラムについては検討中であり、本日具体的に示すことができる資料はなく申し訳ない。検討の途中経過について、口頭で報告させていただく。 ideal スクールの仕組みについてだが、多様な生徒に対応し、できるだけ多くの選択肢を提供できるような単位制高校にしたいと考えている。できるだけ広範な選

	択肢ということで、授業科目は約 80 科目の設置を想定している。どの高校でも同じように必ず履修する必修科目などは 15 科目程度（国語・社会・数学・理科・英語などの科目）、その他は選択科目となる。選択科目において、様々な生徒に対応した科目を設置したいと考えている。 想定される履修科目のパターンは大きく 4 つある。 1 つ目は学び直しが必要な生徒対象の科目である。義務教育課程などでの学び直しの 5 教科＋6 科目を予定している。国語・社会・数学・理科・英語の各科目のベーシックラーニング（数学ベーシック・国語ベーシック・英語ベーシック等）である。現在大学と連携して科目の内容の検討を行っているところである。もう少し具体的な想定としては、授業が始まる前の 10 分間ずつ、各ベーシック科目の国語・数学・英語を短い時間で AI ドリルを使って授業をし、生徒が学び直しをできる科目を設置することを考えている。例えば数学では、ベーシックの数学で学び直しをした後に、必修科目の数学Ⅰを履修する。学び直しをした後、同学年で一緒に学習するようなイメージを持っている。 2 つ目は、自分のペースで就職を目指して頑張りたい生徒もいると考えており、就職に対応した科目として 15 科目ほどを想定している。主に商業科目、商業の情報系の科目を想定している（ビジネスコミュニケーション、プログラミング、情報処理など）。その他の学校設定科目は、大学と連携して科目の検討を行っている。「ジョブインターンシップ」は、年間を通じて週に 1 回、様々な企業や役所などにインターンシップをしに行くものである。 3 つ目は、国公立大学の進学にも対応した授業を設定したいと考えており、例えば数学であれば数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学 A・B・C という幅広い科目を設定しており、各科目で国公立大学への進学にも対応できるような授業科目を履修できるようにしたい。 4 つ目は、探究的なものについても導入したいと考えている。大学との連携を検討しているものである。STEAM、データサイエンスなどの科目名である。地域の行政政策・イベント等が地元産業をどれくらい振興できているか、ということを経済統計などのデータを活用しながら、他の生徒と協働して課題解決のアイデアを出す、などを授業で行うような探究的な授業も予定しているところである。 もう一点、どのような生徒が入学することを想定しているかという話だが、想定している生徒像は、資料 7 ページ、ideal スクール新設についての前回の専門委員会で報告したものである。左下の求める生徒像にあるように多様な生徒に入学してもらいたい、と考えている。 学校について、どのような生徒が入学してくるか調査しているところである。実際にどれぐらいの生徒が、定員 200 名に対して入ってくるかについて、今のところまだ想定はできていないところである。 どのような生徒が入ってくるかについては、ある程度想定をしている。 まず、大学のような、自由な単位制の学校であるため、フレキシブルに自分のペースで学びたい、自分のペースで大学進学や就職を目指したい、という生徒が一定程度いると考えている。 また、学校に通えない傾向のある生徒が一定程度いると思われ、統計的には、令和 4 年度、学校に登校していない生徒数が 1 学年あたり 500 人程度いると言われていた。そのような生徒も対象の層となると考えている。 その他、広域性の通信制に進学する生徒が、近年年間 600 名程度いる。また、定時制についても 300 名程度いる。そのような生徒の進学先にもなると考えている。 その他、現在の宮城広瀬高校の近隣に居住している、現在宮城広瀬高校に進学する生徒も ideal スクールに距離的に近いということもあり、進学するのではないかと考えており、60 名から 100 名ぐらいの生徒が進学する。 以上を合計すると、大体 1 学年あたり 1500 人ぐらいはおり、そのような生徒が受験をするのではないかと。現在はその程度の想定をしているところである。
委員長	未決定、検討中のところが多く、委員の意見を伺うと様々な観点からの意見になってしまうと思われる。今回は特に入学者選抜という点に関して 2 つの観点に絞っ

	て委員の方々の意見をいただきたい。 １点目は、先ほどの資料７ページにある「求める生徒像」の中の１つ目の箱にある「自分のペースで学びながら大学進学等を目指す生徒を選抜する」という点に関して、現行の入試制度で、その枠で選抜するということが可能なのかという点も踏まえて、委員の方々から幅広い視点から御意見いただきたい。担当ごとに聞かせていただきたい。 まず、高校担当の委員の方、御意見を伺いたい。
佐藤彰委員	高校の立場では、この１つの観点だけで、入学者選抜を行う場合は、現行の入試制度の中でも可能であると思われる。ただ、様々なタイプの生徒を受け入れるとうたっており、当然様々な生徒が受験をする。そうすると、１つの物差しでは当然難しい。コースや学科を設けず、一度で入試を行うと思われるが、そうしたときに、先進校の例を見ると、意欲の面をアドミッションポリシーと照らし合わせるとしている。ideal スクールの場合に、この「求める生徒像」で意欲があるかどうかを、大阪のように使って判断するのであれば、不登校気味の生徒は１の大学進学等のところは当てはまらない場合も出てきて、ゆえに求める生徒像に「合致しない」のかな、と漠然と今考えていたところである。 ただ、先進校・大阪の方では、〇〇科志望の生徒は、このアドミッションポリシーを判断材料にする、△△科志望の生徒は別なアドミッションポリシーを判断材料とする、というやり方をしているところもあり、この「求める生徒像」と、入試の際の意欲をどう図るかという部分について整合性がとれるように整理する必要があると感じる。
佐々木委員	現行の入試問題で入学生を測っていく、というところを悩ましく思い、考えがまとまっていない。現行のものを使うのか、新たに別の問題を特別に ideal スクールのために作るのか、という議論も必要だと思う。ただ、どちらがいいのかについては、まだ自身の考えがまとまらない。ただどちらにしても、学力を測るものは必要だろうと思っている。多様な生徒を求めるということは、それだけ多様な学力層の生徒も入ってくる。 大学進学という面だけでなく考えたときに、今の勤務校でも生徒の学力幅が大きく、正直、どの層をターゲットにして指導するか悩ましいところもある。学力を見て、成績上位の生徒をいろいろ指導していきながら成績下位の生徒を引っ張ってもらい、授業だけでなく学校作りをしていく中では、生徒会の生徒などと教員が一緒になって学校作りをしていくために、ある程度学力を担保しながら、成績上位の生徒たちが成績下位の生徒を引っ張っていく場面も出てくると思う。そういった意味では学力を測ることができる入試問題は必要になると思っている。 今回の ideal スクールでは、かなり多様な生徒がいるため、先進的な大阪のような入試制度の検討も必要になると思っている。
委員長	今度は生徒を送り出す中学校の側からの御意見をいただきたい。
菊池委員	資料１２ページの「求める生徒像」と「入学者選抜に期待されること」とを合わせて読んだ。「入学者選抜に期待されること」は、単に学力を評価するのではなく意欲を評価すると説明されており、中学校の立場からは大変うれしいことである。ただし、中学生は誰もが高校に入りたいと考えており、意欲はどの生徒もあると思われる。 そのときにどの志望者を高評価にするか、というのは難しいとは思いますが、今も特色選抜においてそのようなことをやっていただいております、あまりかけ離れてるわけではないかとは思いますが。学力を評価するのではなく、となってしまうと基準が難しいと思う。 学力は学力が必要だと思うが、他の現行の高校のシステムと違うのは何かというところが難しいと感じている。不登校の生徒たちもたくさんおり、もちろん自分で勉強してはいるが、思うように点数に結びつかない生徒もいる。それでも、どうしても高校に入りたいという生徒もおり、逆もいる。 そのときに我々中学校としては、基準がある程度公平に見えると、進路指導はしやすいと思う。

吉田委員	私も同じ意見で、この「求める生徒像」によって基準が違っている。送り出す側としては、「基準に達していればいけるから頑張ろう」と自信を持って言える何かが必要かと思う。 特色選抜でコースごとの、国公立大学を目指す生徒は何人までというような枠が内々でできないと、選抜基準に達しているかどうかを測るのは難しいと思う。それをどこまでお示しいただけるのか、少し心配な点ではある。とても難しいと思う。
委員長	それでは最後に、保護者の観点から佐藤英委員に御意見願う。
佐藤英委員	難しいと思って見ていた。親からすると、まず子供が自分の行きたい高校に入って欲しいというのがまず一番にある。その先を考えると、親としては大学まで行ってもらったらいいいというのがあるが、自分のペースで学びたい制度というのが腑に落ちず、自分で勉強しなければならないのかと思う。 また、コースが分かれていないため、選抜するのに大変悩まれるのではないかなと漠然と思った。 また、やはりある程度基準がないといけないと思う。学力が低いから目指せないわけではなく、子供たちはたくさんの可能性を持っていると思う。これから自分のペースで学力を急激に上げられる子もいると思うが、塾ではその子に合わせたところで、学力がある程度に達していないと、個別指導になったり、なかなかついていけなかったり、ということがある。 行きたい高校となるとやはり数字が出てきて、偏差値がそこまで届いてないと、そこは無理ではないかと、面談で言われるところもあり、ある程度の基準というのは、やはり必要なのではないかなと思う。
委員長	やはり一筋ではいけない難しい課題かと思う。貴重な御意見に感謝する。 それでもう一つの観点で、先ほども見た「求める生徒像」の後半のところには、例えば学校に登校していない期間があるなど、学校生活や学習に不安を抱える生徒などの選抜もしなくてはいけないと書かれている。そうした場合、どのような形が考えられるのか。例えば、先ほどの資料の最後、13ページに、検討事項をいくつか挙げていただいた。学力検査のほか、調査書、面接、志願理由書、作文、その他の選抜や意欲を測る選抜のやり方について等である。学習等に不安を抱える生徒の選抜に関して、やはり現行の入試制度の枠がどこまで適用できるのか、できないのかといった点も含めて、また御意見をいただきたい。 先ほどと同じ順番で高校側からいただきたい。
佐藤彰委員	非常に難しいところだと思うが、この検討事項のところにある項目をすべて平等に当てはめて数値化してしまうと、おそらく不登校の生徒には相当厳しい入試になると思われる。 それを考慮して、ある項目の部分について、配慮した上での評価ができるような基準があればいいと思っていたが、それがどこになるのかというのは難しい。欠席が少ないから優遇するのかというと、やはりそれも違う話になってくる。 欠席とは関係のない、何かいいところを引き出せるようなものを考えると面接になるのかと思うが。このようなことが観点として出てくればいいと思う。
佐々木委員	ideal スクールの求める生徒像には、大学進学を考えていけば、自分のペースで学びたいなど、どの生徒像にも何々で学びたいと書かれている。そういう点を見ていく。それを数値化するかどうかは別として。 大阪や他の県でもやっているかもしれないが、自己申告書や計画書など、自身をアピールするものがあれば、ideal スクールとして受け入れて一緒にやっていきましょう、ということが言えるようになるのではないかな。 そうすると例えば、面接・報告書・計画書・作文などが考えられる。これらによって、生徒を選抜し引き上げていく。受験生のいいところを見つけ、入学後伸ばしていくというような形が取れると思う。どの方法が一番良いのかはまだまとまっていない。
委員長	今度は中学校の側からの御意見をいただきたい。
菊池委員	先ほどと少し話が被るが、自分のペースで学びたい、など「自分で」というところが今回のテーマなのかなと思う。そうすると、意欲の高さを測るのは難しいと思

	っていたが、他の委員の話を聞いていて、曖昧な部分を含むものの、どれだけ自分が入学したいのかということは何かでアピールをするような機会があると私たちは指導しやすい。「正しい」「正しくない」ではなく、自分が何をやりたいのかを本当に考えてそれを高校に伝えよう、という指導をしていくことは可能である。 ただし、基準が全くないと我々も生徒に「大丈夫じゃないかな」など曖昧な声がかけてになってしまう。自分をアピールする力が、これから求められ、子供たちにそういう力をつけさせるのは私たちの仕事だと思っている。そのため、意欲の高さを測る機会があるとより良いと感じている。
吉田委員	大阪府立の高校のように自己申告書など事前に提出するものに加えて、面接や作文もしていただけると良いと思う。学校に来られなかった、学べなかったという生徒の多くは、対人的な部分に課題を抱えている場合も多く、当日の面接、作文だけで評価されてしまうと、苦しいところもある。 意欲が思うように伝えられない、という部分もあるかと思う。しかし、事前に準備したものだけで判断してしまうと、教員の手が入っていて正確な判断が難しくなるため、事前提出と当日の試験等を組み合わせるのが良い。
委員長	それではまた保護者の方からの御意見をいただきたい。
佐藤英委員	うちの子もそうだが、学力だけでは判断していただきたくない、というのがあ る。先ほども申したように、偏差値だけでは、数字だけでは測れないような力をそれぞれ持っていて、勉強はできなくても、いい生徒がたくさんいるので。 不登校も実際増えているが、そういった生徒に対しても学力だけではなくて、どれだけその高校に行きたいかという意欲があるかどうかというのは、作文や面接でその人となりを見てほしい、というのがあ。それを引き出すのが周りの大人の役割ではないか、と思った。子供たちの個性を見ていただきたい、と思った。
委員長	御意見に感謝する。私からも意見を言わせていただく。 混乱をさせてしまう意見かもしれないが、今回のような議論をすると必ず意欲を測ることが出てくるが、特に困難を抱えている生徒に意欲がある、という点はよく考えなければならないと思う。 最初から学校に行きたくないということであれば、それはそれでいいのだが、何をしたいか分からないという生徒が、今非常に多いのではないかと思う。そのような生徒の意欲を測る場合、何ができるのだろうか。 面接や作文を課せば、それなりに対応するようなものを形式上出すとは思いますが、それは本当のその生徒たちの意欲を測っているのだろうか。 そもそも意欲が高い状態にある生徒だけを入学させるということが、この ideal スクールの理念において、本当にいいのだからかと感じるところがある。特に代替案はないのだが、意欲だけを測って前進していくことで、いろいろな生徒を受け入れる、という観点から見てどこまで達成できるのか、というのが少し気になった。以上が個人的な意見である。 本当に様々な御意見をいただき感謝している。この ideal スクールにおける入学者選抜のあり方について、今後も検討していく上で、参考となる御意見を多数いただけたと思う。 本日の検討のまとめやさらなる調査等を、引き続き事務局にお願いして、次回の審議につなげていきたい。本日の審議は以上で終了としたい。進行を事務局にお返しする。
事務局	(事務局より事務連絡)